

ウルドゥー小説翻訳上の偏向とその問題点

鈴木 斌

私は自分が専攻しているウルドゥー短編小説を翻訳紹介するにあたって常に、英訳ではこれまでにどういう作品が取りあげられているかについても注意を払ってきた。このことは、別に、英訳されている作品を選んで和訳しようという意味をもつものではなく、翻訳者がどのような作品を選択しているのかを見るためである。選択にあたっては当然ながら作品に対する一定の評価がなされている筈であるし、又、その作品を取りあげる何らかの意図があるわけであるから、そうした評価や意図を知り、今後自分が翻訳しようとする作品を選ぶうえでの参考にするためである。ところが、実際には、個々の作家のウルドゥー短編集、複数の作家の作品を集めたウルドゥー短編集、文芸誌などに単発で翻訳が発表されたもの、などを見ると、同一の作品が異なった翻訳者によって重複して取りあげられている例が数多くあることに気付くのである。例えば、プレームチャンド Prēmchand(1880—1936) では Kafan の訳が The Shroud という題で、ラージェンダル・スィング・ベーディー Rājindar Singh Bēdī(1915—1984) の Lājwanti の訳が Lajwanti という題で、クリシャン・チャンダル Krishan Chandar (1914—1977) の Sipāhī が The Soldier という題でそれぞれ数種類出ているといった具合である。プレームチャンドの Kafan は和訳でも数点出ているぐらいであるが、その他の作家の作品でも再三再四英訳されているものが数多く見出される。今、もしこれを我々が目指している一つでも多くの現代ウルドゥー短編小説の紹介という目標から見れば、余り好ましい現象と申すことはできない。今回はこの問題が最も端的に現われている作家として、ウルドゥー短編作家の中でインド・パーキスタンだけでなく我が国を含む海外でも最も高い評価を得ているサアード・ハサン・マントー Sa'adat Hasan Manto(1912—1955) の場合について見ていくことにしたい。マントーに関しては既に1970年7月12日に第21回大会においてその作品と技法に触れているので、ここでは彼の短編小説の英訳の現状に絞って問題を取りあげることにする。

マントーはその生涯に二百編以上の短編小説を発表している。私がこれまでに

まとめた数は二百五編であるが、酒を求めてボトル一本と引き換えにした作品や、他人に売った作品などにはどういう形で発表されたか不明のものがかなり含まれているであろうから、実際にマントーの手になる短編は二百数十編を上廻ると考えてよいと思う。とにかく、この二百五編余の短編の中で現在までに英訳されているものは五十四編にのぼっている。まず、英訳が収録されている単行本には次のようなものがある。内容はマントー短編集、ウルドゥー短編選集、インド短編集、パーキスターン短編選集の類である。

D.L. Milton, W. Clifford. (ed.): A Treasury of Modern Asian Stories. New American Library, New York, 1961.

Faruq Hasan. (ed.): A Touch of Reality. Dawson College, Montreal.

(Frances W. Pritchett: Urdu Literature; A Bibliography of English Language Sources, Manohar, New Delhi, 1979.)

Hamid Jalal: Black Milk. Al-Kitab, Lahore, 1956, 254p.

Jai Ratan. (ed. tr.): Modern Urdu Short Stories. Allied Publishers, New Delhi, 1987, 200p.

Jai Ratan. (ed.): Contemporary Urdu Short Stories. Sterling Publishers, New Delhi, 1991, 219p.

Jai Ratan. (ed. tr.): The Best of Manto. Sterling Publishers, New Delhi, 1989, 158p.

Khalid Hasan. (ed. tr.) Under the Green Canopy. Afro Asian Book Club, Lahore, 1966, 308p.

Khalid Hasan. (tr.): Partition; Sketches and Stories. Viking, New Delhi, 1991, 111p.

Khalid Hasan, Faruq Hasan: Version of Truth; Urdu Short Stories from Pakistan. Vikas, New Delhi, 1983, 273p.

Khalid Hasan. (tr.): Kingdom's End and Other Stories. Penguin Books, New Delhi, 1989, 257p.

Khushwant Singh, Jaya Thadani. (ed.): Land of the Five Rivers. Jaico Publishing House, Bombay, 1965, 178p.

Krishan Gopal Abid. (ed.): Stories from Pakistan. India Paperbacks, New Delhi, 1977, 167p.

- Leslie A. Flemming: Another lonely voice; The Life and Works of Saadat Hasan Manto. Vanguard, Lahore, 1985, 306p.
- M.C, Gwen, Gabriel (ed.): Call it A Day; A Selection of Modern Indian Stories. Siddhartha Publications, Delhi, 1968.
- Ahmed Ali, (ed.): Selected Short Stories from Pakistan. Academy of Letters, Islamabad, 1983, 234p.
- Mulk Raj Anand, Iqbal Singh(ed. tr.): Indian Short Stories. New India Publishing Co., London, 1946, 194p.
- Pritish Nandy. (ed.): The Vikas Book of Modern Indian Love Stories. Vikas Publishing House, New Delhi, 1979, 210p.
- Ramesh Mathur, Mahendra Kulasrestha. (ed.): Writings on India's partition. Simant Publications, Delhi, 1976.
- S. Viqar Azim. (com.): Pakistan; Modern Urdu Short Stories. R.C.D. Cultural Institute, Islamabad, 1975, 192p.
- Sukrita Paul Kumar. (ed.): Breakthrough; Modern Hindi and Urdu Short Stories. Indian Institute of Advanced Study, Simla, 1993, 335p.
- Waqas Ahmad Khwaja. (ed.): Pakistani Short Stories. UBSPD, New Delhi, 1992, 178p.
- Yunus Said. (ed.): Ten years of vision. Pakistan Publishing House, Karachi, 1963, 338p.

単行本の他には、学術誌、機関誌、文芸誌などに掲載されたもので、具体的には Mahfil (後に Journal of South Asian Literature); Michigan State Univ., Asian Studies Center, Phoenix; Univ. of Chicago, Pakistan Quartely, Pakistan Review, Illustrated Weekly of India, Perspective, Vision, Span, Thought などの雑誌に紹介されたものである。これらの雑誌類ではミシガン州立大学アジア研究センターの機関誌が質量共に抜んでた存在で、1985年夏秋号 (VOL. XX NO. 2) では短編十二、人物寸描一、よりなるマントー特集号が出されている。

今ここで、これら五十四編を重複して発表された数に基づいて延数として数え直してみると全部で百十六となり、平均すれば一編の作品がほぼ二度ずつ翻訳されている勘定になる。この百十六編の中で同一の翻訳者によって訳された同じ作

品が異なった場に出されているものは四編だけである。このように見てみると、マントーの二百編余の短編の約四分の一が英訳されていることが分かり、数の上では中々のものであるように思われるが、実際には、一編が平均して約二回ずつ翻訳されているといったような単純なものではなく、幾つかの作品に翻訳が集中しているという現象があることが分かる。すなわち全五十四編中の二十六編については翻訳が一回だけ出されているのに対し、残りの二十八編に延九十の翻訳が集中しているのである。更にこの九十の翻訳を翻訳回数の多い順に並べていくと、上位十編に何と延五十四回もの翻訳が繰り返されていることがはっきりする。この十編を翻訳されている回数の多い順に並べると次のようになる。Tōbā Tēk Singh(9), Nayā Qānūn(7), Kālī Shalwār(6), Hatak(6), Mōzēl(6), Khōl Dō(6), Bū(4), Tētwāl ka Kuttā(4), Śarak ke Kinārē(3), Khālī Bōtlē Khālī Dībē(3)。以下十一位は翻訳二回の十八編で、これに翻訳一回だけの作品が続いている。翻訳二回の作品中には Tḥandā Gōsht をはじめ原作は非常に有名な Bābū Gōpī Nāth, Ākhiri Salūt, Bādshāhat ka Khātima Yazid などが目白押しに並んでいる。マントーの代名詞のような Tḥandā Gōsht の翻訳が少ないのは意外であるが、この作品の質的な評価はともかくとして、一時的にせよ猥褻文学として裁判沙汰になり発禁処分されたような作品を一般的な短編選集に加えることにはなおかなりの抵抗があるからであろうと思われる。翻訳二回の短編には以下のような作品がある。Sirāj, 1919 Ki Ēk Rāt, Swarāj ke Liye, Gurmukh Singh ki Waṣiyat, Khudā ki Qasam, Mūtri, Nikki, Phātō, Taraqqī Pasand, Sārḥē Tin Āne, Khushiyā, Sharifan, Aulād。翻訳一回の短編にも Mammi, Sarkandōṇ ke Pichhē, Shahid sāz, Mammad Bhāi, Phundnē のような主要な作品が含まれているから、翻訳に当たって作品の重要度にはさほど大きな考慮が払われていないのではないと思われるのである。ここで、翻訳される作品を選ぶ上での目安について、何点かの資料を併せて比較しながら見ていくことにする。

まず、資料として五点を取りあげ、これら五点に収録されているマントーの短編、又は挙げられている代表的作品の名前を比べてみる。資料五点は次の如くである。

- (1) Encyclopaedia of Indian Literature. Sahitya Akademi, 5 VOLS, New Delhi, 1987-94.
- (2) Leslie A. Flemming: The Life and Works of Saadat Hasan Manto.

Vanguard, Lahore, 1985, 306p.

- (3) Jai Ratan: The Best of Manto. Sterling Publishers, New Delhi, 1989, 158p.

- (4) Manṭō ke numāinda afsāne. Maktaba-e-‘ilm o fann, Lāhōr, 1984, 208p.

- (5) Mērē muntakhab afsāne. Hind Pocket Books, Dehli, 205p.

マントーの短編で英訳された回数の多いものは先述の通りであるが、今ここで上記の資料五点について共通している作品を列挙してみると次のようになる。資料 (1) については代表作として題名が挙げられている作品である。

- (1) Toba Tek Singh, The new Law, The black trousers, The insult, Mozelle.

- (2) Toba Tek Singh, New Law, Black trousers, The Insult, Mozel.

- (3) Toba Tek Singh. The New Order, The Black Saṭwar, Slight, Mozel.

- (4) Ṭōbā Ṭek Singh, Nayā Qānūn, Kālī Shalwār, Hatak, Mōzēl.

- (5) Ṭōbā Ṭek Singh, Nayā Qānūn, Kālī Shalwār, Hatak, Mōzēl.

こうして見ると英訳回数が上位の五作品は (1) の資料で挙げられている代表作とまったく同じであることが分かる。資料 (4) (5) はパーキスターンとインドで出版された平均的なウルドゥー語の短編集であるから、この点からもマントーの代表的短編作品と目されているものは Ṭōbā Ṭek Singh, Nayā Qānūn, Kālī Shalwār, Hatak, Mōzēl の五作品であると言ってよいであろう。以上の作品に次いで英訳回数の多い五編については資料 (1) ~ (5) で評価が異なってくる。まず、六位の Khōl Dō についてみると、(1) で Undo it, (3) で Loosen Up, として取りあげられているだけである。(1) はマントーの代表作としての評価であるが、(4) (5) がいずれもこの問題作を無視しているのは好ましからざる作品として発表誌の Nuqūsh が六ヶ月の発行停止処分を受けたいわくつきの短編だからであろう。六位の Bū についても同様に (1) で The odour として評価されているのに対して、他の資料ではやはり (3) で Odour の題名で収録されているのみであり、(4) (5) では無視されている。マントーとイスマット・チュグターイー ‘Iṣmat Chughtāi, ハージャ・アフマド・アッパース Khwāja Aḥmad ‘Abbās の問題作ばかりを集めた Urdū ke behtarīn afsānē (Indiyan Akeḍemī, Nāi Dillī, 191p.) に Ṭhandā Gōsht などと一緒に両作品が収録されているのを見ても、ウルドゥーでの一般的なマントー短編集には載せ難いのであろう。

英訳回数八位の *Ṭeṭwāl ka Kuttā* は (2) に A Tetwal Dog として出ているだけである。カシミール紛争を扱ったこの佳編は微妙な主題ながら今後もっと紹介されてよからうと思われる。九位の *Sarak ke Kinārē* は (2) で “By the Side of the Road” として、その他では (4) で取りあげられているが、十位の *Khālī Bōtlēḥ Khālī Ḍibbē* は (2) で Empty Bottles, Empty Boxes の題名で収録されているに過ぎない。

英訳回数が二回の作品では、(1) で代表作に挙げられている Babu Gopinath が (4) と (5) のみに入っているのは、原作の高い評価が必ずしも直ぐに英訳へと結びつくものではないことを示している。同じく、(1) で代表作とされている The cold flesh は (3) で A Lump of Cold Flesh の題名で取りあげられているだけで (4) と (5) には見当らない。反対に、英訳が Mummy として「Kingdom's End」(Penguin Books) 広く紹介された Mammi は (4) と (5) の両方に入っている。Bābū Gōpināth と同じような傾向のこうした作品は英訳よりも原作の方に深い味わいがあると言えそうである。なお、猥褻な作品として問題になった *Dhūaṇ* はこれまで翻訳の対象となっていないようであるが、マントー研究の一環として当然もっと早く英訳が試みられてよからうと思う。

資料 (1) でマントーの代表作として挙げられている The black marginalia は (3) でも Black Marginalia という題名で短編の一つとして収録されているが、この作品の取り扱い方については一応の注意が必要である。Siyāh Hāshiye という原題のこの作品を L.A. Flemming は “collection”, F.W. Pritchett は “Short Story” に分類しているが、実態は三十二の小編あるいは掌編から成る一冊である。Siyāh Hāshiye という題名の作品はなく、全体をこの名前の下にまとめているわけである。一編は長いもので六十九行短いものは二行 (Maktaba-e Jadid, Lāhōr, 1952版による) と幅があり、各編を独立した短編と呼ぶことはできない。「The Best of Manto」には三十二編中の二十三編が訳出されているが、紙数の都合以外に残りの九編を落とす理由は見当たらない。分類としては他の短編集とは別に、掌編集とすべきであろう。

以上、マントーの短編の英訳が代表作と目されている作品、特に五編に集中していることが明らかになった。どうしてこのような事になるのか、それは意図的な紹介書や研究書は別として、一般的な商業出版では第一に売れることを考えるからに他ならない。マントーといえ、まず代表的作品、評価の定まっているような安全な作品を並べてマントー短編集を編むか、ウルドゥー、インド、パーキ

スターンなどの名を冠した短編選集に加える安易な方法がずっと続けられてきたのである。では、重複によるこうした無駄や手間を省くために、何故既存の翻訳を収録しようとはしないのかという疑問が生じるかもしれない。これには勿論のこと面倒な著作権や翻訳権の問題が絡んでくることが分かっているからである。インドとパーキスターンは共にベルヌ条約、WIPO、UCC の加盟国であるが、両国間の問題となると、文学者や作家は勿論、書籍、文学書、雑誌などの流通も行なわれていないことは周知のところである。作家自身が知らないうちに勝手に種々の短編集が出版されるようなことも珍らしくない。海賊版以前の問題というべきであろう。このような状況では翻訳者との間で面倒な交渉に時間と金をかけるより、身近な所で翻訳してしまう方が遙かに簡単なのである。

一方で、より良い翻訳を提供するためには同一作品に何人もの翻訳者が現われるのも已むを得ない、という議論もあるが、私としては、ウルドゥー短編小説の英訳は、マントーの作品に限ってみても、原文をとばしたり、地方語など特殊な単語や慣用語の入っている会話を省略したりしているものが平気で出版されているのが現状であると述べるに留めておく。翻訳における直訳と意識の是非については又、別な問題として改めて取りあげることしたい。

英訳されるマントーの短編が非常な偏りを示していることは指摘した通りであるが、二百編余の彼の作品の中には優れた作品や高い評価を受けたもの、話題になったものも少なからず存在しているのである。こうした作品を地道に翻訳して紹介する仕事こそが、作家マントーの実像に迫り彼の作品の理解を深めていくうえで重要であることは言うまでもないところである。この点から、現在までに一回ずつ紹介されている二十六編の短編について見てみると、二十六編中の九編が単発で雑誌で紹介され、八編が「Kingdom's END」中に、そして五編が「The Life and Works of Saadat Hasan Manto」に収録されている。フレミングの本は題名の如くマントーの生涯と作品を詳しく分析した優れた研究書であるが、一般の商業本ではなくこうした研究書で初めて紹介される作品の意義は非常に大きなものがある。Thief (Chōr), Basit (Bāsīt), Sharda (Shārdā), Peerun (pīrun), Phato (Phatō) の五編がこれによって日の目を見たわけである。「Kingdom's End」もこの点で従来のものとは著しく内容の異なった編集である。収録されている全二十三編の短編には Toba Tek Singh (Ṭōbā Ṭek Singh), The Dog of Titwal (Ṭeṭwāl ka Kuttā), The Last Salute (Ākhiri salūt), The New Constitution (Nayā Qānūn), Mozail (Mōzēl), The Assignment (Gurmukh Singh

Ki Waṣīyat), Colder than Ice (Ṭhaṇḍā Gōsht), Babu Gopi Nath (Bābū Gōpināth), By the Roadside (Sarāk ke Kinārē), Kingdom's End (Bādshāhat Ka Khātima) などのような評価の定まった作品と並べて Doing God's Work (Shahīdsāz), The Woman in the Red Coat (Ḍārling), Free for All (Dekh Kabirā Rōyā), A Question of Honour (Mammad Bhāī), The Room with the Bright Light (Sau Kainḍal Pāwar Ka Balb), A Man of God (Sāḥab-e Karāmāt), Mummy (Mammī), The Wild Cactus (Sarkanḍōṇ Ke Pichhē) の八編が収録されていることは、今後マントー作品の翻訳が地についた形で本格化していくことを期待させるものである。

翻訳の問題に関連して、ここで作品の原題の翻訳についても触れておきたい。全体的に見れば、マントーの短編の英訳題名は Toba Tek Singh, Babu Gopinath, Mozel, Mummy のような人名はそのまゝ、固有名詞を含むものも The Dog of Titwal のように直訳、普通名詞の題名も直訳あるいはそれに近い題名、例えば Kālī Shalwār が The Black Shalwar, Hatak が Insult, Khudā ki Qasam が I swear by God のような場合が多い。なおかつ、例えば Khōl Dō のように明解な原題についても Open up, Loosen up, Open it, Unfasten, Undo it, Sakina, The Return など幾つもの異なった題名が与えられている。この作品は (Khirkī) Khōl dō 窓を開けろ。という医者の一言がすべてと言ってもよいほど非常に重要な意味をもつ作品であるから、題名は Open 以外は不適切であると思う。この問題は英訳に限らず和訳の場合においても同じ難しい問題なのであるが、現在までに和訳された二十八編の短編の題名はすべて直訳を用いている。

以上、マントーの短編小説の英訳について、作品の選択に非常に偏りが多いことを述べた。ウルトゥー短編小説の書き手としてインド・パキスタンのみならず翻訳作品を通じて海外でも高い評価を得ているマントーの著作が広く読まれるようになるのはまだまだこれからのことである。1948年1月にインドよりパキスタンに移住し、1955年1月にこの世を去ったマントーの歿後五十年を迎える十年後が著作権の切れ目でもあり、新たなマントー全集、英訳作品集の出版のための大きな機会となるのではないかと私は考えている。

〈キーワード〉 小説, ウルトゥー

(東京外国語大学名誉教授)